今鏡本文及び総索引

榊原邦彦
藤掛和美編
塚原　清

笠間索引叢刊　85

序

榊原・藤掛・塚原・武山の四君は、それぞれ業績を積む一方、共同して索引編集の業を続けて来て、ほとんど二十年になる。この間過去において、『枕草子』『古活字本狭衣物語』総索引を刊行して、学界に寄与するところがあつた。これらの編集・刊行にはその都度相談に与つて来たのであるが、今回『今鏡』総索引の時は、私の方から積極的にその作製を要望したのであつた。今から五年以前のことである。ところが偶然か、あるいはその時期が来たといふべきであるか、その後の状勢は、今まで余り読まれることのなかつた『今鏡』の領域に、俄かに春の到来を思はせるやうな事態になつた。すなはち、昨年は海野泰男君の『今鏡全釈』上巻が刊行されて、本格的注釈書に先鞭を付けた。同時に竹鼻績氏も注釈書の原稿がほとんど完成したことを仄聞したし、松本治久氏も「並木の里」に注釈稿を続行中であり、また保坂弘司氏も畢生の意気込みで、『今鏡』全評釈に着手したのであつたが、図らずも本年二月急逝されて未完に終つた。いづれにしても、このやうに、『今鏡』を対象とする注釈が相次ぐ形勢になつたことは、『大鏡』を除いては概して不幸な境遇に置かれてゐた歴史物語の世界に、遅まきながら学界の目が集中するやうになつた結果といつてもよからう。

『今鏡』は、寂超藤原為経の著作と考へられる。さう思つて読むと、従来指摘されて来たやうに、芸能史的・和歌史的な面において特色が認められるばかりでなく、思想的な面において極めて興味深い歴史物語といふことにもなる。従来余り読まれなかつたのは、注釈書も無かつたし、作品自体にとつつきの悪い

ところがあつたりしたためであるが、今後はそんな事はない。大いに読まれて関心も寄せてほしいし、研究の面からいつてもその余地はたくさん残されてゐるはずである。この総索引の刊行は、かうした時期に符節を合はせたやうで、まことに時宜を得たことといふべきである。その原稿を一覧したところでは、編者達もだんだん経験を積んで来たこととて、従来とは異なつた工夫も見られるし、歴史物語の特色である人名の扱ひにも考究の跡がうかがはれる。恐らく使用し易く、実用的に利便の多いものと思ふ。『今鏡』に見られる特異な語法の研究にも、また語彙の面からも本索引を十分に活用して、従来明らかでなかつたところを闡明してほしい。

索引の他にその依拠する本文を付けたことも好ましいことである。『今鏡』は入手し得た唯一の日本古典全書本が絶版になつて以来、手ごろなテキスト皆無の状態であるからである。その本文は『新訂増補国史大系本』『活字版畠山本』等を底本とし、蓬左文庫本その他を参照して作製されたものであるから現段階としてはこれでよしとしなくてはならない。『今鏡』の諸本研究はまだ校本の作製にまで到つてをらず、信頼すべき校本の刊行が翹望されるのであるが、それまでにはまだまだ時間がかかるであらうからである。それにしても索引の仕事は大変な事で、編者達は長い期間公務の余暇よく頑張つたものである。今回は四君のうち、武山君は身辺多忙の故、業の途中にして参加できなくなつたやうな事情はあるが、協同して地味な研究分野に敢然取組んだ編者達に深い感謝の念を捧げるものである。

昭和五十八年三月

名古屋大学名誉教授　松村博司

目次

松村博司

序
本文篇
凡例……(八)
目録……一
序……五
すべらぎの上 第一……九
くも井……九
もちづき……二三
子日……一三
きくの宴……二五
はつ春……一五
金のみのり……二六
ほしあひ……一八
つかさめし……二九
すべらぎの中 第二……二四
たむけ　又宮はしらとも……二四
所〻の御寺……五一
みのりのし……二六
白河花宴……五三
もみぢのみかり……二九
鳥羽御賀……五七
つりせぬうら〳〵……四三
はるのしらべ……六〇
たまづさ……四七
やゑのしほぢ……六三

すべらぎの下　第三……六六
をとこやま……六六　をとめのすがた……八一
むしのね……七一　ひなのわかれ……八三
おほうちわたり……七五　花園匂……八五
内宴……七八　二葉松……八八
ふぢなみの上　第四……九一
ふぢなみ……九一　はちすのつゆ……一〇七
梅のにほひ……九五　をのゝみゆき……一〇八
ふしみの雪の朝……九七　うすはなざくら……一一一
くものかえし……一〇二　なみのうへのさかづき……一一三
しらかはのわたり……一〇四　宇ぢのかはせ……一一五
ふぢなみの中　第五……一一三
みかさの松……一一三　かざりたち……一一七
きくのつゆ……一一八　こけのころも……一四二
ふぢのはつはな……一二〇　はなやま……一四五
はまちどり……一二三　みづぐき……一五〇
つかひあはせ……一二五　ふるさとの花の色……一五二
ふぢなみの下　第六……一五五
ゑあはせのうた……一五五　竹のよ……一七八
から人のあそび……一五八　梅のこのもと……一八一

たびねのとこ……一六二
ゆみのね……一六四
かりがね……一六八
ますみのかげ……一七四
むらかみの源氏 第七……二〇一
うたゝね……二〇一
ほりかはのながれ……二〇五
ゆめのかよひぢ……二〇八
ねあはせ……二一一
ありすがは……二一三
みこたち 第八……二三二
源氏の宮す所……二三三
花のあるじ　又は宮の大将とも
源氏大将とも……二三五
むかしがたり 第九……二五七
あしたづ……二五七
いのるしるし……二六〇
からうた……二六四
うちぎゝ 第十……二七七
しきしまのうちぎゝ……二七七
花ちるにはのをも……一八七
宮木野……一九一
しがのみそぎ……一九六
むらさきのゆかり……二一六
にゐまくら……二一九
むさしのゝくさ……二二四
もしほのけぶり……二二九
ふしゝば……二四〇
月のかくるゝ山のは……二四三
はら〳〵のみこ……二四六
まことの道……二六七
かしこき道〳〵……二七三
ならのみよ……二八八

つくり物がたりのゆくゑ……二九三

総索引篇

凡例……三〇〇
あ……三〇五　す……四一四　の……四九八　や……五六五
い……三一三　せ……四三三　ゆ……五七〇
う……三三三　そ……四二四　は……五一一　よ……五七一
え……三三八　た……四三〇　ひ……五三三
お……三三九　ち……四四六　ふ……五三九　ら……五七六
か……三四九　つ……四五〇　へ……五三三　り……五七七
き……三六三　て……四五五　ほ……五三五　る……五七九
く……三七三　と……四六〇　ま……五三八　れ……五八〇
け……三七八　み……五四六　ろ……五八〇
こ……三八三　む……五五三　わ……五八一
さ……三九四　め……五五六　ゐ……五八三
し……四〇四　も……五五八　ゑ……五八四
ね……四九七　を……五八五

あとがき